

超人・浦西和彦

——氏のプロレタリア文学研究に導かれて

大和田 茂

1

浦西和彦氏のことを思い出すとき、一口で言えば、細くて長いお付き合いだったという表現が適当であろうか。ときどき定期的にお会いするような仲でもなく、出版などで濃密な関係性もなかったが、晩年に至るまで、ご著書をしばしば恵送していただき、恐縮の極みだった。また、ときおりの資料などの問い合わせには、つねにきちんとお応えいただき、進呈した拙文・拙著などにも、必ずご返信を頂戴した。

浦西氏と最初に顔を合わせたのは、たしか一九八五年五月二五日、日本社会文学会の創立大会後の懇親パーティーの場で、少し言葉を交わしたと記憶する。氏は学会というものにはあまり出席しないようであったが、社会文学会には特別の思いもあつたのだと思う。この学会にもめつたに顔を見せなかったが、

印象深いのは、一九八八年一〇月、大阪の帝塚山学院大学で開催された秋季大会研究発表の司会ぶりだった。「発表時間を多くとりたいので、発表者紹介は省く、したい人は自分で、では始めます」というだけの味もそつけないもので、いかにも書誌学者らしく合理的だなと一人感心していた。

学会等ではめつたに会うことのない浦西氏だが、氏が四〇代半ばから五〇歳近くの頃であろうか、ときどき国会図書館や日本近代文学館で姿をお見かけした。お互い調べものに集中しているのでもろん短いあいさつ程度だが、氏は私に対して「大変やねえ」と言われるのがつねであった。東京にいる私の方から見れば、関西から出てきて調べものに歩き回る方が大変だろうと思うのだが、怠け者の私にいつもこんな言葉をかけてくれた。一度か二度か忘れたが、駒場の文学館で帰りが一緒になり、駅前の喫茶店で一時間ほどおしゃべりをしたこともあった。おそ

らく私が、浦西氏の師にあたる谷沢永一氏を通じて親交していた小田切秀雄氏の門下だということもあり、弟分のように親切にしてもらったのかもしれない（『小田切秀雄全集』別巻で年譜と書誌を担当したのは、浦西氏だった）。どちらかという児童顔の方で、いつまでもお若く見えるので、私より二、三歳上かと思いつ込んでいたら、九歳も年長であったとは、うかつにもお亡くなりになってやつと気づいた。

それはまだインターネットなどない時代であつて、関西在住でも「何か書誌を作成しようとするれば、坂下町（氏が若い頃高校教師をしていた岐阜県中津川市坂下町——大和田注）にいた時と本質的には同じであつて、結局、東京まで出かけて行くより仕方がない。そんなに古い雑誌や特殊な本でなくて、ごく最近の、しかもどこにでもあるように思われる本や雑誌が、地方にいるとなかなか容易に確認することが出来ないのである」（『書誌偶感（私の書誌作法）』、『図書館雑誌』一九八九年二月号）と書いているように、徹底した資料調査のためには、頻繁な東京出張は必須だった。やはり学会などに出ているヒマはないのである。

2

氏のことは社会文学会創立以前から、むろん存じ上げていた。私たち法政大学系の研究者たちで一九七七年に大正労働文学研究会を立ち上げ、機関誌『大正労働文学研究』を七号まで出し

た。浦西氏はその定期購読者だったが、私に限らず会員諸氏は氏から資料提供を受けたり、また問い合わせをいただいたり、ときどき情報交換をしていた。そして研究会解散後、『日本プロレタリア文学書目』（日外アソシエーツ一九八六年）が出たときの衝撃は忘れられない。こんな群小作家までと思うほどの多くのプロ作家の著作を一九四五年まで二五一一冊も網羅している。我が研究する労働文学の諸作家、新井紀一、丹潔、中西伊之助、平沢計七、平林初之輔、宮嶋資夫、宮地嘉六の著作リスト、データが詳細に収録されている。わずかな欠落はあるが、ほぼ完ぺきに近い。驚きとともに、研究会での成果が少しお役に立っているというひそかな実感を得た。むろん、葉山嘉樹、中野重治、佐多稲子、徳永直など少数を除けばプロレタリア文学作家には、しつかりとした書誌がない。小林多喜二でも、あまた研究書はあるが、書誌は不十分で、なぜか浦西氏は手つかずであった。この『書目』は私には座右の事典のような存在となっている。その後『著述と書誌』第四巻ではさらに増補改訂し充実した内容になっているが、横組から縦組になっており、目録類は個人的には横組の方が読みやすい気がして、旧版を使うことしばしばである。

その後、浦西氏は様々な人物の書誌、全集、事典などを破竹の勢いのごとく編纂しているが、総合的な仕事としては『昭和文学年表』全九巻（明治書院一九五〇—一九九六年）という大仕事を達成して、さらに『文化運動年表』の明治・大正編と昭和

戦前編二冊（三人社二〇一五、二〇一六年）を「浦西和彦著」として刊行したときには、また驚かされた。たとえば「宮地嘉六が牛込の下宿を引き払い、本郷千駄木町の下宿に移る」（一九二七年九月頃）とか「小林多喜二が新井紀一宅に出かけたが、見当たらず会うことができなかった」（一九二八年五月一九日）とか、実に細かく文学者や社会運動家の動向が日録風に書かれている。浦西氏は、どれだけ作家の年譜や伝記、日記、あるいは新聞の彙報欄等を机上にそろえてこの年表を書いたのだろうか。あるいは、氏の記録作業はカードに拠ったのか、またはパソコン出現後はそのスキルに習熟していたのか、作成の現場を垣間見たいという思いに駆られたこともあった。

たしかなことは、『日本プロレタリア文学書目』から上記の年表類、そのあとに出た『日本プロレタリア文学史年表事典』（日外アソシエーツ二〇一六年）までのまさに超人的な仕事の産物のおかげで、後塵を拝する我々プロ文研究者の仕事はどれだけ効率が上がったことか。その学恩は測り知れない。ついでに言えば、これら労作の数々には、すべて索引（人名索引、書名索引）が付してあることである。これは重要で、各書の機能性をさらに高める。たしか「索引のない本は死刑にせよ」とは、東京・本郷の古書店ベリカン書房店主にして内村鑑三研究者である品川力氏の名言であったと聞くが（氏の名を冠した文庫が日本近代文学館にある）、索引があるのとないのでは大ちがいなのである。実は、浦西氏の著書にも索引のないのが少なくとも二冊ある。

それは『日本プロレタリア文学の研究』（桜楓社一九八五年）と『現代文学研究の枝折』（和泉書院二〇〇一年）という代表的論文集であり、かねがねそれに不満を抱いていた私は、それらが『著述と書誌』の第一巻、二巻として増補刊行されたとき、巻末に詳細な「人名索引」「書名・作品名・記事名索引」が付されているのを見て、またまた感じ入った次第だった。

かつて拙著『社会学・一九二〇年前後—平林初之輔と同時代文学』（不二出版一九九二年）を出したとき、浦西氏から「地味なうえに地味な仕事」という評言をいただいたが、私はそれを褒めことばとして受けとめた。なぜなら「地味なうえに地味な仕事」を重ねて、数々の書誌の大作をなしている浦西氏だからこそと、不遜にもそう思ったからである。

3

ところで、浦西氏は書誌の人だけではない。先の二冊の論文集を読めばわかるように、プロレタリア文学作家を中心として、実証的かつ的確な読み裏打ちされた多くの作家論、作品論も発表している。たとえば「伊藤永之介「梟」について」（『日本プロレタリア文学の研究』所収）は、先行研究文献の誤読、誤記を指摘・訂正したうえで、プロレタリア文学運動壊滅の逆境を乗り越え「昭和十年代にもっとも奮闘した作家」という平野謙の言葉を引きながら、「梟」という作品が、戦時下、秋田の農

村における濁酒密造の悲劇を描いたものとして、次のように述べる。

酒役人の非道な圧迫ぶりが最初に描かれる。「梟」には、このお作婆さんの話をはじめ、濁酒密造について、お峰と与吉の物語をたて糸にして、無数の挿話を書き込まれている。濁酒密造に関係するおびただしい人物が出てくる。特定の個人の性格を主に深く追求して描くということに作者の興味や関心があるのではない。個人の生活や心理よりも濁酒密造という現実の社会相を描くことにあるようだ。

浦西氏は、「梟」から始まる「鶯」「鴉」「燕」「鷗」などいわゆる鳥類ものとされる、伊藤の農村小説の手法を鋭く見抜き、また、これらは現実よりどぎつく描いたフィクションなのだとする作者の言を鵜呑みにせず、当時の新聞記事を精査して、戦時下の農民たちの小説同様のいやそれ以上に過酷な窮乏、悲惨な状況を発見し、そこに小説のモデル性を見出している。そして、伊藤が「戦争に進んでいく時勢に決して批判の目を失って」いない点を指摘し、ファシズムに抗した作家の一人だと位置づけるのであった。

『本庄陸男全集第五巻』解説』（『現代文学研究の枝折』所収）においては、山田清三郎が一九二九年にプロレタリア文学作家から採ったアンケート（略歴、プロ文学作家になった動機、作品リ

ストなどに答えた本庄の回答、すなわち米も食えない少年期の悔しさが「青年期になりかける頃平沢計七氏のアヂ演説に体係づけられました」（プロレタリア文学に入った動機）という回答に氏は注目する。ナツプ系の作家、運動家として「猪突猛進」の勢いで活動した本庄が、当時、「最も模範的な働き手」であり公式的な作品や教育論しか書かなかった理由を山田が指摘するナツプの政治主義的方針の「誤謬」に見るよりも、本庄自身が平沢計七のアジテーションに自縛され、むしろ積極的にプロバガンダ芸術に惹かれていた結果だという見解を示している。そして、プロ文学運動消滅期に至り、これらの呪縛が解け本庄は文壇でも注目された小説「白い壁」で、やっと文学的本領を發揮し始めたとみるのであった。

これら慧眼というしかない独自の作品論、作家論にはいろいろ教えられるが、さらに浦西氏の別の側面をあげるなら、大阪ゆかりの作家に関する仕事の数々であろう。谷沢永一、武田麟太郎、開高健、織田作之助、田辺聖子、河野多恵子といった人物の書誌や全集編集に加え、『大阪近代文学事典』（和泉書院二〇〇五年）、『大阪近代文学作品事典』（同二〇〇六年）、『大阪文学書目』（遊文舎二〇一〇年）などがある。故郷大阪への偏愛、いい意味での大阪への文学的愛情発露の仕事といえる。

私にとつて、浦西氏の死は突然であった。まだご活躍中とばかり思っていたのに、闘病生活を送っていたとは知らなかった。七六歳とは惜しまれるべき年齢だと思いが、還暦を迎えて刊行

した『現代文学研究の枝折』の「あとがき」には、すでに「私にはこれから残された最後の時間の猶予がどのぐらいあるのか、一切わからないし、見当もつかない。ただもはや暢気にのんびりに構えているわけにはいかない年齢に達したことは確かである。それだけに残された時間を無駄にしたくないという思いが切実にする」という一節があり、これを読んだとき、人生九〇年の時代、こんなことを言うのはまだ早いのではないかと思っただ記憶がある（念頭には、早逝した書誌学者青山毅氏のことがあったかもしれない）。しかし、この立派な覚悟の通り、その後の一五年間、『著述と書誌』四巻をまとめ、一〇冊以上の書誌、事典、年表の刊行を果たした。私のような常人には及びもつかない情熱とパワーの持ち主であった。やはり超人だったといえる。